



# JACET通信

大学英語教育学会

November 2011 The Japan Association of College English Teachers

No.181

【第50回記念国際大会特集号】

## 「JACET第50回記念国際大会」をふりかえって

山内ひさ子（大会委員長、長崎県立大）

西南学院大学において開催されました「JACET第50回記念国際大会」が去る9月2日に無事終了いたしました。これまで約2年間にわたり大会の計画と準備に携わってこられました大会運営委員会の皆様、大会準備委員会と大会組織委員会の皆様、九州・沖縄支部実行委員の皆様、本当にご苦労さまでした。皆様のご協力とご尽力に心より感謝いたします。

今年の大会はJACETの第50回目の大会でしたので、大会テーマの“Challenges for Tertiary English Education: JACET's Role in the Next Fifty Years”に相応しい、将来を見据えたチャレンジに満ちたものになるように準備委員会と組織委員会で工夫を重ね、通常の大会行事に加えて、さまざまなプログラムやイベントを盛り込みました。基調講演者は4名で、通常の大会の2倍、全体シンポジウムは3件で、「JACET50シンポジウム①、②、③」と番号を打ち、毎日1件ずつ行われました。50周年記念刊行事業として出版した全13巻の『教育学体系』の編著者と海外からのパネリストを交えた「体系シンポジウム」、各支部の研究会による「研究会ポスターセッション」もプログラムを飾りました。また、一般発表に「学生発表枠」が設けられ、若い研究者に発表の機会を設けただけでなく、優秀な発表者を会員総会において表彰しました。さらに海外の提携学会から代表者による「招待講演」に加えて「アコモデーショングラント者」による研究発表もありました。一般発表では英語の発表が大幅に増え、日本人以外の参加者が目立ちましたので、本当の意味での「国際大会」に相応しい大会となりました。

新しい試みもありました。大会要綱には、プログラムと



山内ひさ子 大会委員長

アブストラクト、発表者のバイオデータの一覧表のみを掲載し、九州・沖縄支部で編集しました。また、「大会プロシーディングス」をCD版で作成しました。これにより、口頭発表内容が論文として認められることになりました。JACETの50年の軌跡をまとめたポスターと、写真を編集したDVDの放映により、これまでのJACETのあゆみを公開しました。大会最終日に日本語による発表を集め、海外からの基調講演者や招待講演者等を対象に、半日観光ツアーを提供しました。参加登録を旅行社に委託し、本部事務職員の業務負担の緩和を図りました。大会前日に開催した「前夜祭」では、海外からのゲストと会員が親しく歓談する機会を設けました。大会当日は大会組織委員や大会実行委員とアルバイト学生はよく目立つ黄色のシャツを身につけ、参加者の世話にあたりました。このような取組の中

のいくつかが、JACETの新しい伝統として、引き継がれていければ大変うれしく思います。

大会の準備と大会当日の実行の中で、反省点も多いのですが、本部の皆様と開催支部の実行委員との連携が大会を成功させる上で非常に重要であると思われました。本部と支部とが、上下関係ではなく、お互いに不足の部分を補い合い、問題が生じた場合にはよく話し合い、協力し合うことにより、初めてうまく解決ができると痛感いたしました。

大会では参加者のお世話では行き届かなかったところが

多々あったとは思いますが、大会懇親会の終わりに武井実行委員長による気合の入った「博多一本締め」の最後の「パン、パン、パン」の手拍子のように、流していただければ幸いです。

最後に、会場を提供していただいた西南学院大学、補助金の援助をいただいた福岡観光コンベンションビューローをはじめ、大会を支えてくださった展示協賛業者の皆様、キャンパスサポート西南の皆様、それに参加者すべての皆様にお礼を申し上げます。

## 「JACET 第50回記念国際大会」の準備と開催

寺内 一（大会組織委員長・副会長）

何年もの準備を重ねてきた「JACET第50回記念国際大会」が無事に終了しました。その準備からの足跡を辿りながら今回の大会を改めて振り返ってみます。

森住会長（当時）がJACET創立50周年の記念事業として掲げたのは、全13巻の英語教育学大系の刊行、50周年記念誌の刊行、それにこの第50回記念国際大会の開催の3つでした。それらの事業遂行のために会員の皆様からの寄付も募りました。

この第50回記念国際大会は九州・沖縄支部の担当であることは前から決まっておりましたが、通常とは違う記念大会となることから、開催の2年前から準備委員会を設置し（委員長は神保副会長（当時））、基本的な骨子を作成していきました。大会1年前には準備委員会を組織委員会と改め（委員長は寺内）、支部の実行委員会と本部の運営委員会と綿密な連携を取りながら具体的なプログラム作成に入りました。そのために準備委員会9回、組織委員会3回、地元実行委員会15回、大会運営委員会15回開催しました。

その間、大会用のホームページを立ち上げ、最新のニュースを提供するとともに、2つのサーキュラーを作成し、国内も会員にはもちろん海外を含む関係諸機関の方々にも大会のことを周知させてまいりました。また初の試みとしてConference Alertというサイトに登録し、世界中の人がこの記念国際大会のことを認識できるようにしてみました。海外からの発表は提携学会の会員であることを条件にしましたが、国内外を問わずすべての発表申し込みはもちろん参加登録もオンラインで行えるようにいたしました。

前記の山内大会委員長の巻頭言にございますが、第50回記念国際大会に相応しいプログラムの作成はもちろん、今までのJACETを振り返りとともに明日のJACETを考えるということテーマにした50年の軌跡のDVDの作成や、名誉会員や提携学会の会長からのお祝いメッセージの掲示などさまざまなプロジェクトを企画しました。

まずは今回後援いただきました団体名をあげておきます。文部科学省、福岡観光コンベンションビューロー、福岡県教育委員会、福岡市教育委員会、在福岡米国領事館、

駐福岡韓国総領事館、駐福岡中華人民共和国総領事館、在福岡オーストラリア総領事館、ありがとうございました。

大会参加者数は910名（展示業者80名を含む）で、西南学院大学関係者や学生アルバイトも含めると1,000人を超える大きな大会となりました。そのうち、基調講演などの招待者による発表された枠を特別枠、一般発表の枠を一般発表枠と区分しますと、前者の特別枠は85名で9か国（1地域）から、一般枠は262名で8か国（1地域）からで、文字通り国際大会となりました。これにJACET-SIGのポスタープレゼンテーションは44名（+α）が加わります。

次にプログラムの詳細の数字です。基調講演4件、招待講演13件、JACET50シンポジウム3件、特別シンポジウム3件、特別委員会シンポジウム2件、特別委員会ポスターセッション1件、大系シンポジウム8件（以上特別枠）、研究発表91件、実践報告10件、事例研究10件、シンポジウム12件、ワークショップ8件、ポスターセッション10件、賛助会員発表7件（以上一般枠）、JACET-SIGポスターセッション34件、合計232件。展示業者35件（65スペース）でした。

また、今回新たな試みとして取り入れた学生会員発表枠は研究発表12件とポスターセッション1件が審査され、そのうち2件が最優秀学生会員発表賞として表彰されました（詳細は会員総会報告を参照のこと）。

大会初日に配布されたプロシーディングス（正式名称The JACET International Convention Proceedings）はISSNを取得し、今後の大会でも作成し続けていくことが確認されています。その中には、214件の論文が含まれております。

最後になりますが、本大会開催のために何年もかけてご準備をされてきた九州・沖縄支部の実行委員会のメンバーをはじめとした九州・沖縄支部の会員の皆様と国際大会に相応しい充実した施設と関係者をご提供いただきました西南学院大学に対しまして改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

## ◆大会報告◆

山岸信義  
(全国大会担当理事・組織委員会副委員長、  
東京家政大学)

JACET第50回記念国際大会は、2011年8月31日(水)、9月1日(木)・2日(金)の三日間、「高等教育への新たな挑戦—JACETのこれからの50年」という大会テーマのもと、西南学院大学にて開催されました。発表件数は合計232件にのぼり、3日間で約1,000名の参加者を得て大盛会のうちに幕を閉じました。

今回の大会では、JACETの過去50年間を振り返り、今後の50年を展望する様々なシンポジウムや特別企画がありました。今回の大会では初めての試みとして、「学生会員発表枠」の審査と表彰を行いました。第50回記念国際大会からプロシーディングスを作成し、大会時にCD-ROMを配布いたしました。

今回の第50回記念国際大会を機に、「全国大会」は「国際大会」に名称を変更することになりました。

研究発表審査も第50回記念国際大会より本部事務所での一斉審査ではなく、審査委員の自宅での審査となり、専門性を考慮し、全国の先生にお願いしています。

最後に、50周年記念国際大会の準備にあたってご尽力いただいた山内ひさ子大会委員長、武井俊詳実行委員長をはじめとする大会実行委員の先生方、第50回記念国際大会準備委員会と組織委員会の先生方、全国大会運営委員の先生方、それに本部事務局の方々に衷心よりお礼申し上げます。さらに、会場をご提供頂いた西南学院大学関係者に感謝申し上げます。

## ◆会場校として◆

武井俊詳  
(西南学院大)

JACET創立50周年記念の大会の会場としてのご指名は大変光栄でした。西南学院大学(SGU)での全国大会開催は1989年以来21年振り。経験はあるものの、当時の記憶も薄れ、また、様々な事情の変化もあり、不安でした。研究発表の形式が、20世紀の当時、文字通り「ペーパー・プレゼンテーション」ばかりであったものが、21世紀も10年経った今はPCを用いたエレクトロニクス・プレゼンテーションが標準となり、隔世の感です。幸い、SGUでは時代の趨勢に対応してほとんど全ての教室がマルチメディア完備になり、個々の持ち込みPCとの相性等でご不便をおかけしたケースもありましたが、まず無難に対応できたのではないのでしょうか。受付と展示会場に21年前と同じ2号館の学生ホールを使用しましたが、この「受付・展示会場が一体」の利便性は今回も役立ったのではと思います。しかし、この大会が大過なく運営できましたのは、何よりも、山内ひさ子九州沖縄支部長の精力的かつ堅実な指導力と、21年前同様の九州沖縄支部の大会関係委員の積極的・献身的な協働の賜物です。会場校の関係者なので手前味噌になりますが、ペニンントン和雅子氏、雪丸尚美氏、そして柴戸直善氏の3名の多大な尽力無しには会場校としての役割を果たすことは覚束なかったことでしょう。更に、大学職員、特に施設課の作業班の協力、アルバイト学生の働きにも感謝を禁じ得ません。また、福岡観光コンベンションビューローのご支援の有難さを痛感しています。感謝です。

## 社団法人大学英語教育学会 2011年度会員総会議事録

尾関直子(代表幹事、明治大)

日時:2011年9月2日(金) 12:05-13:15  
場所:西南学院大学 2号館 201教室  
司会:尾関直子(代表幹事)  
書記:湯澤伸夫(副代表幹事)、上田倫史(関東支部事務局幹事・総務委員)

### I. 開会

司会の尾関直子代表幹事により会員総会の開会が宣言された。

### II. 会長挨拶

神保尚武会長より、「昼食時にもかかわらず、お集まりいただき、ありがとうございます。本日は緊急セッションがあり、それに20分間費やしたいため、報告は30分程度

で済ませたいと思いますので、よろしく願いいたします」旨、ご挨拶があった。

### III. 議案

#### 1. 総務関係

寺内一総務担当理事より、資料に基づき、2011年度会員状況報告(1頁)、JACET創立以来の会員数(2頁)、2010年度活動報告(3-8頁)、2011年度活動計画(9-14頁)に関する説明があった。

#### 2. 財務関係

浅川和也財務担当理事より、資料に基づき、2011年度予算執行の現況報告(15-23頁)、2011年度予算報告(24-25頁)に関する説明があった。

#### 3. 役員改選関係

寺内一総務担当理事より、資料に基づき、2011年度役員(26-29頁)に関する説明があった。

#### 4. 中長期計画

神保尚武会長より、資料に基づき、今後の中長期(2011年度から2013年度)(30-33頁)に関する説明があった。

#### 5. 一般社団法人への移行認可申請について

神保尚武会長より、一般社団法人移行認可申請に関して一般的な説明があり、その後、寺内一総務担当理事より、資料に基づき(30頁)説明があった。なお、以下の通り、訂正事項があった。

- ・平成23(2011)年6月 社員総会で一般社団法人化の方針を審議決定した。
- ・理事会で「定款(一次案)」の検討審議した。
- ・平成23(2011)年8月 理事会で「定款(二次案のたたき台)」を審議し、9月の会員総会で現状報告をする。
- ・平成23(2011)年12月 臨時理事会で「定款(二次案)」及び「公益目的支出計画(一次案)」を審議する。
- ・平成24(2012)年3月 理事会と社員総会で「定款(三次案)」及び「公益目的支出計画(二次案)」の審議をする。
- ・平成24(2012)年6月 理事会と社員総会で新法人への「定款(確定案)」及び「公益目的支出計画(確定案)」の審議決定し、提出資料を確認する。
- ・平成24(2012)年7月 申請をする。
- ・平成25(2013)年4月一般社団法人として発足する。

#### IV. 大学英語教育学会賞授与式

高橋潔大学英語教育学会賞選考委員会委員長の司会のもと、小嶋英夫同委員会理事より、対象となる以下の研究の説明があり、大学英語教育学会賞(実践賞)が田地野彰京都大学大学院教授他6名の編著者に授与された。

京都大学アカデミックライティング研究会(『Writing for Academic Purposes — 英作文を卒業して英語論文を書く』)

#### V. 第50回記念国際大会最優秀学生発表賞授与式

野口ジュディー津多江理事より、第50回記念国際大会

最優秀学生発表賞を以下の2名の発表者に授与する説明があり、授与式が行われた。

- ・K. Hosogoshi (Kyoto U.) 'An Investigation of the Relationship between Visual Information and the Listening Process'
- ・C. Lee (National Taiwan Normal U.) 'Developing English Oral Communication Skills for EFL University Learners'

#### VI. 緊急セッション

2011年3月11日の東日本大震災にあたり、大学英語教育学会の定款第4条[目的]および第5条[事業]の(1)および(4)に鑑み、「災害時における言語文化支援—東日本大震災における外国人のための情報提供」の観点から、森住 衛桜美林大学大学院教授・大学英語教育学会前会長(「3.11が提起する言語文化問題と学会の対応—メディア情報を中心に—」)と松原好次電気通信大学教授(「東日本大震災が一英語教師に突きつけたこと」)から緊急提言が行われた。

#### VII. 感謝状贈呈

寺内一総務担当理事よりJACETに貢献された以下の方々に感謝状が送付されたとの報告があった。

理事経験者：門田幹夫

監事経験者：上田明子、安藤賢一、土屋澄男、吉岡元子、田中駿平、小林祐子、田中幸子、園城寺信一、武久文代

#### VIII. 閉会

以上をもって社団法人大学英語教育学会会員総会の議事を終了したので、閉会を宣した。

別添資料：

1. 会員総会資料
2. 緊急提言

(文責 湯澤伸夫)

## 【基調講演1】

### The Interface Hypothesis Revisited

Rod Ellis (U. of Auckland)  
Chair: Hisatake Jimbo (Waseda U.)

The Interface Hypothesis addresses the relationship between implicit and explicit knowledge of a second language. It claims that these two types of knowledge are distinct but that knowledge originates in its explicit form

and subsequently develops into implicit knowledge. While, there is broad acceptance of the separateness of explicit and implicit knowledge, theories of L2 acquisition vary as to whether they accept an interface and, if they do, what the nature of the interface is. This paper reports the results of three studies that have attempted to design tests that provide relatively separate measures of implicit and explicit knowledge. It concludes with a discussion of studies that have attempted to investigate the different interface positions.



## 【基調講演 2】

### The Teacher's Codeswitching and the Learner's Strategic Response: Towards a Research Agenda and Implications for Teacher Education

Ernesto Macaro (U. of Oxford)  
Chair: Hisako Yamauchi (U. of Nagasaki)

Whether the first language (L1) of the learners should be used in foreign language (L2) classrooms stretches back over a hundred years. The L1 undoubtedly contributes to the inherent tensions in Communicative Language Teaching (CLT) in that CLT is an approach which rests largely on communication of meaning through the L2. A possible reconciliation of this tension comes through associating naturalistic codeswitching with classroom codeswitching whereby communication of meaning can be achieved through two or more languages, as long as the teacher is a bilingual. However, an optimal balance between L1 and L2 distribution in classroom interaction has still to be established. What we therefore need is a clear theory-led research agenda. This talk will set out what I believe the agenda should be, and present research carried out at Oxford which has begun to address that agenda. I will also draw some implications for teacher education.

## 【基調講演 3】

### Tasks, Conditions, and Characteristics: Understanding the Influences upon Task Performance

Peter Skehan (U. of Auckland)  
Chair: Nobuo Okada (U. of Osaka)

This article reports on task research into two areas — the effects of varying task conditions and the effects of different task characteristics. The former concerns planning and also the contrast between here-and-now vs. there-and-then conditions. The latter concerns the importance of task structure. The two sets of influences are clear and fairly strong in their effects. The findings from the two research studies which are covered here are used to relate task performance to basic psycholinguistic processes in second language speech production, as well as providing implications for second language pedagogy.

## 【基調講演 4】

### JACET50 年：その過去、現在、未来 —学会活動の柱とその使命—

小池 生夫 (慶應義塾大学名誉教授、  
JACET 特別顧問)  
司会：寺内一 (高千穂大)

大学英語教育学会の創立 50 周年記念大会を迎え、会員の皆さまとその発展を祝い、来し方の軌跡を確認し、さらに将来を展望し、それに向かう覚悟を共に新たにしたい。現在は過去からの連続に新たな伝統をつくる。それと同様に将来像も現在から見えるものである。われわれは、近未来に試練の時を迎えると予想する。その状況のなかで、重要なことは、本学会の活動の方向の軸足がぶれないことである。その軸足は、「JACET の綱領」に盛られた精神である。われわれは、広く世界に目を向け、大学の英語教育ばかりでなく、日本の英語教育を検討し、その改善目標を定め、JACET は単なる研究学会にあらず学生のための運動体であることを改めて認識すべきである。ここに 50 年の主な活動を年代順に纏めて学会活動の柱とし総括し、現在、将来の活動の拠り所としたい。

## 【招待講演 1】

### Can Language Planning Predict the Future? Can Language Professionals Influence Language Policies?

Joseph Lo Bianco (U. of Melbourne)  
Chair: Yasukata Yano (Waseda U.; Prof. Emeritus)

This convention sets itself two (immense) tasks of prediction: the future of tertiary English education, in Japan and by extension globally, and the role of JACET, and by extension professional academic bodies in general. The first raises questions of language forecasting, specifically of second languages, while the second addresses issues of the relationship between those who have professional knowledge and policy makers at both government and institutional level.

In commenting on the first I will discuss issues surrounding the question of language choice. In a recent overview of the first foreign language in education systems across the world over the past 150 years (Cha and Ham, 2008) it becomes clear how closely tied language choice is to 'world events'. Does this mean that if we understand current 'world events' and their

relationship to language choice we can predict the future? In fact this is an enterprise fraught with conceptual and methodological difficulty. I will approach this problem by reviewing tools devised to address patterns of language choice (Greenberg, Lieberman, Kuo, De Swaan, Calvet and Ostler), and their critiques, and then offer some, always hazardous, reflections on what future globalization might entail linguistically speaking. I will contrast forecasts and calculations about English with those made on behalf of the so-called “new English” i.e., Chinese, in the context of the Asian and Chinese ‘century’ also predicted commonly these days (Lo Bianco, 2007; Lo Bianco, Orton and Gao, 2009; Lo Bianco, 2009; Lo Bianco, 2010). The second question relates to the link between professional associations and language professionals with language policy. In response to this I will offer some thoughts about how organisations like JACET can position themselves for future influence based on how we understand policy making, which is ultimately a fusion of economics, politics and knowledge.

## 【招待講演2】

### Teaching English as an International Language: FAQ

Aya Matsuda (Arizona U.)  
Chair: Hiroshi Yoshikawa (Chukyo U.)

The use of English as an international language (EIL) and its implications for language teaching have attracted much scholarly attention in recent years. However, much of the discussion has focused on the problems of the traditional approaches and current practices rather than what changes need to be implemented in language programs and classrooms. This poses a great challenge and frustration for English language teachers and program administrators: while they receive a strong message that their current practice may be inadequate in preparing learners for using English in international encounters, they are not presented with suggestions for where to start implementing changes or what specifically those changes may be. The goal of this presentation is to begin addressing this gap by expanding the existing conversation on EIL teaching with greater emphasis on pedagogical decisions and practices in the classroom. After a brief summary of the limitations of traditional approaches to English language teaching vis-à-vis the global use of English today, the speaker presents a general framework or “blue print” of what an EIL program or

course may entail. She then responds to some common misconceptions and questions about teaching EIL in order to clarify the principles of TEIL behind the suggested framework.

## 【招待講演3】

### ESP: Current Practices and Emerging Issues from Recent Research

Vijay Bhatia (City U. of Hong Kong)  
Chair: Hajime Terauchi (Takachiho U.)

Most of the traditional models of ESP have become inadequate to meet the challenges of the present-day interdisciplinary demands and practices of the academy and the workplace. These challenges have emerged as a result of several developments, some of which include, the growing tensions between the world of work and that of the academy, the complexities of the modern multi-media, encouraging creative forms of information design and presentation, the increasing interdisciplinary nature of most university academic programmes, and the overwhelming colonization and appropriation of generic resources within and across disciplines. These developments seriously question some of the models and practices prevalent in ESP. Recent research in discourse and genre analysis clearly favours a model of ESP teaching and learning which focuses on the acquisition of specialist expertise, which is not only distinct, but also complex and dynamic. Drawing on evidence from recent research in discourse and genre analysis, I would like to raise some of the crucial issues, arguing for a major shift in the teaching and learning of ESP, keeping in mind the subtle but significant variations in the socio-political, multilingual and multicultural patterns of communication in increasingly global contexts.

## 【招待講演4】

### Teaching Additional Languages in New Zealand: Finding Our Place and Facing the Challenges

Adele Scott (Massey U.)  
Chair: Ken Hisamura (Den-en Chofu U.)

The release of The New Zealand Curriculum (Ministry of Education, 2007), gave the learning of an additional language (additional to the language of instruction) more

status than ever before when Learning Languages became one of eight Learning Areas in its own right in this new national curriculum document. The New Zealand Curriculum specifies the progressive learning outcomes which all students are expected to have the opportunity to achieve from year 1–13 of the New Zealand school system. This document is a guide for planning rather than a set of rules which dictate the content, and is flexible enough for teachers to select, adapt, develop and create appropriate learning materials to meet the needs of their students.

So what does this mean for teachers of languages in instructed settings? Given that not many primary schools teachers have knowledge of an additional language, how will languages be taught? Indeed, how are they taught now? While many people had fought long and hard for languages to have a place in the new curriculum, there is little available data on what is happening in languages classrooms. In order to find out what teachers' perceptions of their own skills and knowledge are in regard to teaching languages and to determine the nature of language teaching in New Zealand, a national online language teacher survey was conducted. This presentation will briefly outline the creation of the survey items as well as reflecting on some of the new challenges faced by teachers with little or no knowledge of and/or proficiency in the language they seek to teach. The impact of the Learning Languages learning area on pre-service teacher education programmes will also be discussed.

### 【招待講演5】

#### Can Japanese College Students Learn to Write in English?

Paul Kei Matsuda (Arizona State U.)  
Chair: Tomoyasu Kimura  
(Nagoya U. of Foreign Languages)

Once a neglected skill, the teaching of writing has become a global phenomenon. Publications and presentations on writing and the teaching of writing abound at international conferences and in international journals; in fact, productive literacy has become one of the most sought-after “language skills” (for the lack of better terms) for students, teachers and researchers from around the world. Yet, the same cannot be said about Japan. While there is a small but growing group of teachers and researchers who specialize in writing, writing has not received the same level of attention from those who are

involved in language teaching in Japan that it has in many other parts of the world. This is puzzling given the high level of education and literacy as well as Japan's stature in science, technology, economics, and many other domains of knowledge. In this presentation, I will explore many of the arguments that have often been raised in an attempt to explain — or even justify — the lack of engagement with writing instruction and research in Japan. I will then call for a fundamental shift of perspective that is necessary to facilitate the development of advanced academic and professional English literacy among Japanese college students.

### 【招待講演6】

#### A “Rediscovery” of Metacognition for Enhancing EFL Students' Self-Directed Learning in Asian Classrooms

Lawrence Jun Zhang  
(Nanyang Technological U.)  
Chair: Akihiko Higuchi (Kagoshima U.)

It has taken over 30 years for language learning/learner strategies (LLS) research to come to terms with the status quo it enjoys today (Cohen & Macaro, 2007a). However, if we refresh our memory, we will be reminded that criticisms abound in the existing literature (Dornyei, 2005; Rees-Miller, 1993), which gave rise to setbacks for some scholars working in the field. Reactions are equally vehement (Chamot & Rubin, 1994; Cohen & Macaro, 2007b; Gao, 2006), which are healthy ways of advancing LLS research. Yet, it is not difficult to find that the criticisms levelled against LLS research are often based on an incomplete understanding of its theoretical construct. Therefore, I will argue, as I have done elsewhere (Zhang, 2010), that those critics oftentimes have not thoroughly examined how the metacognitive elements are operationalized in different theoretical frameworks (O'Malley & Chamot, 1990; Oxford, 1990; Wenden, 1991) undergirding LLS research. The critics interpret LLS as if it were a monolithic construct, without given due attention to its dynamic and complex nature. Therefore, I would like to call for a “rediscovery” of metacognition among researchers and practitioners. To achieve this objective, I would like to re-frame LLS within learners' dynamic metacognitive systems. In my view, as dynamic metacognitive systems, metacognition should be construed as something embedded in language learners, which is intertwined with many variables. Yet, in the

criticisms such complexity has not been fully acknowledged. Metacognition being complex and dynamic entails that the construct has to maintain continuous change and adaptation, which are to be enacted upon by learners and induced by the learning tasks, task environments, and sociocultural-sociopolitical contexts, where learning takes place in its “situated” locales. I will elaborate on the dynamic metacognitive systems and their theoretical/practical implications in my paper, concluding that this call is necessary for both researchers and teachers alike to see its contribution to enhancing EFL teaching/learning in Asia.

## 【招待講演7】

### L2 Learning with or without Awareness

Jong-Bai Hwang (Konkuk U.)

Chair: Noriko Kawakami (Kagoshima Junshin U.)

This study explores the role of attention in L2 phonetic learning. There have been many attempts to determine the role of attention in the field of second language acquisition, but most of them have failed to even define the exact concept of attention. This study adopts Tomlin and Villa’s (1994) conceptions of attention, so-called fine-grained analysis of attention, which they insisted are based on literature in cognitive science and divide attention into alertness, orientation, and detection. The present study manipulates the orientation of Korean L2 learners’ attention through varying instructions that require the participants to orient more strongly to one or another phonetic segment in identical stimuli. Forty Korean learners of English were divided into two groups: one experimental, vowel-attending group, and the other control, consonant-attending group. The target pronunciation was the contrast between /i/ (tense) and /I/ (lax) in English, which is known to be difficult for Korean learners of English. Both groups took the same pretest and posttest, which consisted of both vowel and consonant discrimination trials. Between the pretest and the posttest, both groups were trained in an identification task which used the same set of stimuli presented individually over headphones in a forced-choice task with feedback. The vowel-attending group was instructed to attend to word-medial vowels and the consonant-attending group to attend to word-initial consonant. When the correct button was chosen, positive auditory feedback was given, and when the incorrect button was chosen, there was no feedback. The vowel-attending group

demonstrated learning of the target contrasts, whereas the consonant-attending group did not demonstrate learning of the target pronunciation, which confirms that the attentional orientation during phonetic training facilitates learning of the specific class of stimuli to which the participants are instructed to attend.

## 【招待講演8】

### English for International Negotiation at the College Level: A Cross-cultural and Pedagogical Approach

Peter Yen-hao Chen

(National Taipei U.; ETA-ROC)

Chair: Masao Kanaoka (Kagoshima U.)

The purpose of this speech is to explore teaching English for international negotiation in a cross-cultural and pedagogical approach. The speech content is intended for departments of foreign languages and applied linguistics at the college level in their curriculum design of English for international negotiation, as an ESP course.

English for international negotiation is analyzed and applied both in theory and practice to negotiation structure and stages of negotiation cases on various global issues (e.g. trade and economic negotiations, global climate change, water crisis, food crisis, high technology, and humanitarian aides etc.) in the 21st century. It deals with professional and practical terminology (including that in negotiation itself and in relevant cases), rhetorical patterns and modes, cultural and cross-cultural implications, as well as the expression strategies in both language and paralinguistics in phonology, syntax, semantics, and pragmatics as found in different international negotiation cases. In English for international negotiation, the language part deals mainly with messages (what) as expressed by negotiators through issued-centered terminology and rhetorical patterns, and the paralinguistics part involves negotiators’ style (how) as shown in their tone, mood, rhythm, and intonation as a whole through the negotiation language modes of threatening, promising, thomising, bluffing, and lying..

This speech is thus covering 1) characteristics of verbal communicative acts in English for international negotiation, 2) language and paralinguistics in English for international negotiation as delivered in the eight-stage negotiation structure and phases—preparing, arguing, signaling, proposing, packaging, bargaining, closing, and inking—as well as in the negotiation language modes of



threatening, promising, thomising, bluffing, and lying, 3) an analysis of the expression strategies of language and paralinguistics in English for international negotiation, and 4) conclusion and recommendation in its cross-cultural and pedagogical approach and implications. All of these may lead to a more comprehensive curriculum design for both instructors and students of for international negotiation at the college level.

To sum up, teaching English for international negotiation is based on the combination of negotiation structure and phases with their interdisciplinarity. It takes step-by-step pedagogy to master the accuracy, articulacy, and completion in English for international negotiation. To reach this goal, we must sharpen English first and negotiation English later in phonology, syntax, semantics, and pragmatics. The following step is then combining the theories with practices (including negotiation skills) in negotiation cases on various international issues. Constant simulations of and participations in different international negotiations are considered as the best ways to study English for international negotiation in both theory and practice for college students taking a course of this nature.

## 【招待講演 9】

### A Critical Examination of the Teacher-Student Interaction in an English Immersion Situation in Korea

Mae-Ran Park (Pukyong National U.; ALAK)

Chair: Hiroki Yamamoto (Seinan Jo Gakuin U.)

As an approach that English is not the subject of instruction, rather it should be the medium through which learners of English can communicate and capitalize the language on their use has been supported in the English education field. Communicatively oriented-learning and teaching environment is getting more emphasized in the classroom, especially in EFL environment.

Based on this conceptual framework, the immersion program which is targeted to teach academic subject contents through English is in the limelight in South Korea. The South Korean Ministry of Education, Science, and Technology is encouraging English teachers to use the target language in the classroom as a medium of instruction from the primary school level. However, to the majority of teachers conducting a lesson through English is still a great deal of pressure and challenging task, especially to the teachers with lower English proficiency.

In this context, this study aims to examine how teacher-student interaction unfolds focusing on the classroom language among nonnative English speakers of teacher and students through a science immersion program in a local context. The participants are the fourth graders in the science immersion program in a public elementary school in South Korea. To explore the issue, the teacher-student talk is extracted and analyzed through classroom discourse analysis.

Throughout the data analysis, the features of the classroom language and the interaction among the teacher and the students in the classroom will be reported. In particular, the present study attempts to give a special attention to the teacher talk in the classroom since in an immersion program, especially conducted in an EFL environment, teachers take leading roles in the classroom language development and have a tendency to control the classroom language events.

The main purpose of this study is to examine how the discourse develops in the local classroom context from a microethnographic perspective; explore how the teacher talk has influence on the students' language learning, while keeping the balance between the content (subject matter) knowledge and the target language acquisition; critically scrutinize what strategies the teacher uses to facilitate the students' target language use in the context to promote their English proficiency as an ultimate goal; discuss an alternative direction that could present a way applicable to the local context to ameliorate students' communicative and academic competence.

It is hoped that this paper could offer some insights for the teachers engaged in an immersion program in EFL contexts to create strategies with regard to managing teacher talk in order to facilitate students' communicative and academic competence through their own practices.

## 【招待講演 10】

### Innovative Grammar Teaching: Case Studies of Three EFL Teachers at Junior High Schools in Beijing

Luxin Yang

(Beijin Foreign Studies U.; CELEA)

Chair: Eiko Kawagoe (Kobe City U. of Nursing)

This study examined how three EFL teachers at junior high school in Beijing made innovation in their English language teaching after discussion with a university researcher regarding English grammar teaching in an

in-service teachers' professional development program and continual communication between the teacher educator and teachers during and after teachers' practices of innovative teaching methods. The university researcher introduced the teachers the concept of grammaring (Larsen-Freeman, 2001) and demonstrated the practice tasks which could achieve grammaring by actively engaging students in using rather than simply memorizing the grammar rules such as alphabet poems and stem/frame poems. Multiple sources of data were collected, including classroom observations, group discussions, interviews, reflective journals, course materials, teaching plans, student work, and students' comments on the innovative grammar teaching. The qualitative research methods of analytic induction and constant comparison were adopted in the process of data analyses.

Three major findings were emerged from data analyses. First, students' performances surprised teachers as the students outperformed what they usually do under the traditional method of teaching grammar (i.e., detailed explanations of grammar rules and following grammar exercises). Students not only used the grammar rules (e.g., be+doing, attributive clauses) correctly but also expressed their understanding about friendship, environment, and life in their grammar writing tasks properly. Second, students' performance made teachers clearly see the importance of applying the concept of grammaring in stimulating students' interests in English language learning and reconsider the focus of English language teaching (on form or use). The teachers realized that they needed to take into account students' interests in designing their classroom instruction. Third, the collaboration between the university researcher and the teachers was essential and important for in-service teachers to go beyond their familiar and formulaic teaching patterns and critically evaluate their students' learning and their own classroom teaching. Fourth, both students and teachers showed their positive attitudes toward grammaring tasks and increasing interest in English language learning and teaching.

This study contributes significantly to in-service teacher professional development in China and similar EFL contexts. School EFL teachers in China are burdened with two or more large classes with forty or more students each semester. As a result, they seldom have time to read English and research on English teaching and learning beyond English textbooks and related teaching support materials. Therefore, it appears important for university researchers and teacher educators to approach teachers and introduce them second or foreign language learning

and teaching theories through a combination of theories and practices (e.g., a series of manageable classroom teaching procedures and relevant tasks) in an understandable language. moreover, building the collaboration between university researchers/educators and school teachers not only help teachers to crucially assess their daily classroom teaching, and theorize and improve their teaching practices, but also allow university researchers/educators to discover an appropriate method of demonstrating the application of language learning theories and enrich the current theories on language learning and teaching.

## 【招待講演 11】

### New Directions in Testing: Assessment for Learning

Tan Su Hwi (SEMEO; RELC)

Chair: Shin'ichiro Ishikawa (Kobe U.)

Assessment FOR Learning presents new directions for language teaching/learning which can contribute to JACET' s envisioning of how Tertiary English Education is to progress in the years ahead. Proven an effective complementary form of testing to the summative Assessment OF Learning model, Assessment FOR Learning (AFL) sees teachers give formative, in-time scaffolding and feedback to address students' learning gaps. Teachers also engage students in setting learning targets that achieve higher order thinking and better language proficiency for real-world communication.

This paper will describe the testing procedures associated with AFL. It will also analyse its effects on language learners in the context of Singapore, where English educators implemented AFL in line with the English Syllabus 2010. Aligned assessment processes, it will be highlighted, are just as central for improved student performance as curriculum reform and new teaching methodology.

## 【招待講演 12】

### English Language Learning/Teaching in the Past Half a Century in Japan: My Personal View

原田園子（神戸女学院大学名誉教授）

司会：野口ジュディー・津多江（武庫川女子大）

20世紀半ばから今世紀にかけての半世紀は、英語教育の歴史において、19世紀末から20世紀初頭にかけての欧米における外国語教育改革期に始まる“科学的”語学教育が飛躍的に発展していった50年のようなものである。科学的研究の成果として、とって代わって発表されてきた言語理論と心理学の教育理論に基づいて、次々と提唱された新しい教授法や学習法がある。また、教育工学の発展によって開発され、そして、やはり、新しいものにとって代わられてきた教育機器・器具の普及と浸透には目を見張るものがある。更に、押し付けとしての教授ではなく、ヒューマンスティックに学習者の心理そして自らの学びとしての学習に教育の焦点が置かれるようになり、個々の学習者間の競争的学びというよりは、学習者同士の協力的な学習の効果性も挙げられている。

今、国際化というよりはグローバル化の進展によって共通語としての英語の運用能力が地球社会の様々な場においてより広く求められるようになってきている。これは、産業革命後の欧州において交通手段の発達によって行き来が容易になった外国との商業上のあるいは一般市民の交流において必要とされるようになった外国語状況に類似している。このような地球社会において、未だに日本人の英語運用能力には欠けるところがあるとして、将来の“国際人”を養成する素地を培おうと小学校における外国語（英語）活動が始められることにもなった。

真の英語運用能力とは何か？この能力には何が含まれ必要なのか？これはどの様にして培うのか？私自身が生徒・学生として受けた英語教育、教師として携わってきた英語教育、そして英語教員養成課程で指導してきたこと等を振り返りながら、私見として、あらためて長く古いテーマである「英語教育とは？」を再考してみたい。

## 【招待講演 13】

### 東アジア諸国の英語教育研究と 韓国・済州英語教育都市及び ハウステンボス・「英語村」について

木下正義（前福岡国際大）

司会：志水俊宏（九州大）

1997年9月5日に早稲田大学で開催された第36回全国

大会の、開会式に続くJACET賞授与式において、『このままでよいか大学英語教育—中・韓・日3か国の英語学力と英語学習実態—』（松柏社）が最初の学術賞を受賞した。この本を刊本する以前に、九州地区の大学生に対してパイロット・スタディを試み、それを基に「中国・韓国及日本の大学生の英語学力と学習実態」調査を実施した。刊本になるまで、開いた会議の回数は108回に達した。この本の日本の英語教育に対する影響力は大きく、この時期を境に東アジアの英語教育に関する「学会」や「研究会」が次々に誕生し、その後、英語教育に関する国際比較研究が増加したことを見ても、この研究が大きい「牽引車」であったことは確かである。

JACET九州・沖縄支部は他の支部に先駆けて、隣国・韓国の英語教育学会と学術交流を実施し、1998年に韓国ヨンナム英語教育学会（現在：PKETA）と姉妹学会の提携に踏み切った。1999年3月に発足したJACET・SIGの「東アジア英語教育研究会」も12年目を迎える。今年の7月で研究会も通算110回目の開催を迎え、研究『紀要』もVol.4が来春に発刊される。そうした、東アジア英語教育の研究とその実態と東アジア英語教育研究会に触れた話を披露したい。

また、今春、4月に九州・山口経済連合会やハウステンボス(株)のご支援とご協力を得て、九州・沖縄地区で初めて「English Square at Huis Ten Bosch」が開園した。何故このような「English Square（英語村）」が必要なのだろうか。その発足に備えて、韓国の多くの「英語村」を視察した。日本でも、今年から始まっている小学5年生からの英語の「学習体験」の場として「Edutainment」を目指した内容の各種のプログラムが準備中であり、その一つとしてこうした「英語村」の活用が必要と考えたからである。長崎は中国・台湾及び韓国からの旅行者や学生たち一番訪れる場所であり、東アジア諸国からの来訪者や学生との国際交流の場としての「English Square」が活用されることも期待したい。英語村の「開園」までの経緯と今後の展望についてもお話ししたい。

## 【JACET50 シンポジウム 1】

### Future Prospects in Language Education in East Asia: The Common Asian Framework of References for Languages in Learning, Teaching and Assessment (CAFR)

Akihiko Higuchi (Kagoshima U.)

Lawrence Jun Zhang (Nanyang Technological U.)

Zhou Yan (Beijing Foreign Studies U.)

Chan Kyoo Min (Korean National U. of Education)

Ikuo Koike (Keio U., Professor Emeritus)

The symposium's main issues are: whether the CAFR is

necessary; what its functions are, and the considerations needed in its development. The panelists will present salient points from their own cultural differences, geographical conditions, and varieties of English etc. Due to time limitations, it may be necessary to focus solely on the necessity of the CAFR. If time allows, we would also like to discuss the functions of the CAFR, and the ultimate goals of language education in East Asia. This is because the CAFR could also play an important role for mutual understanding in the region leading to a more peaceful community within the different cultural contexts of each country. This symposium is a grand experiment with some potentially sensitive and politically relevant issues and it is hoped that it will act as a launch pad for this issue and its consequences for the regional community.

## 【JACET50 シンポジウム2】

### 21 世紀の言語教育：日本における 複言語・複文化主義の視点の文脈化

神保尚武（早稲田大）  
境一三（慶應義塾大）  
大木充（京都大）  
古川裕（大阪大）  
長谷川由起子（九州産業大）

21 世紀の言語教育に多大な影響を及ぼしているのがヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference - CEFR）である。CEFR は複言語主義（plurilingualism）と多言語主義（multilingualism）を区別している。David Newby によれば、「複言語主義とは、学習された複数の言語と文化は分離した独立体としてではなく統一体、即ち学習者の個人的な言語・文化の体質（空間）としてとらえることを意味する」（p.4, ECML lecture handout）。換言すれば、個人の学習した複数の言語は孤立したものとして存在するのではなく、一方の言語の知識が他方の言語の学習を助け、相互に影響しあい、一言語の知識だけでは得られない広範なコミュニケーション能力を形成するのである。母語以外の言語を1言語以上獲得することは、国内及び国際社会の調和と平和に必須である。CEFR は行動志向の教育観（action-oriented approach）が複言語主義を支えるとしている。それは種々の場面、状況で、具体的に何をどの程度できるかを重視する。この考えから生まれたのが6段階のcan-do list である。従って、それぞれの段階でのコミュニケーション能力の部分的能力（partial competence）を大事にする。

## 【JACET50 シンポジウム3】

### JACET の中長期的な未来： どうなるか・どうすべきか

森住衛（桜美林大）  
村上裕美（関西外国語大短期大学部）  
内藤永（北海学園大）  
浅岡千利世（獨協大）  
荒木瑞夫（宮崎県立看護大）

The role of this symposium is to discuss what JACET should be like in five to twenty years, in preparation for the commemorative fiftieth anniversary of our association in 2012. This symposium has three purposes. First, although anniversary symposia often tend to look back to "the good old days", we will emphasize the future. Second, we would like to reflect the ideas and opinions of our members in our discussion. In order to realize such "bottom up" management, we have conducted a survey of all JACET members and will base our discussions on the results. Third, JACET is planning to officially announce the JACET Declaration in September 2012, and our discussion will serve as the foundation of this announcement. This means that we do not intend to reach any concrete conclusions in this symposium, but rather to discover discussion points to guide the formation of the JACET Declaration.

.....

## 2011 年度 JACET 賞

JACET 賞選考委員会は今年1月に審査を開始し、以下の1点（実践賞）を2011年度JACET賞候補としました。本年6月理事会で本年度受賞者として決定され、去る9月2日の全国大会で授賞式が挙行されました。受賞された京都大学アカデミックライティング研究会の先生方には心からお慶び申し上げます。

### 1. 実践賞

受賞者氏名：田地野彰（京都大・研究会代表）、ティム・スチュワート（京都大）、デビッド・ダルスキー（京都大）、藤岡真由美（近畿大）、クレイグ・スミス（京都外国語大）、金丸敏幸（京都大）、マスワナ紗矢子（京都大学院生）

業績名：『Writing for Academic Purposes —英作文を卒業して英語論文を書く』ひつじ書房。2010.

受賞理由：京都大学における教育ニーズを礎に、全学共通教育チームによるアカデミックライティング研究の成



果に基づき、各学術分野の語彙分析、ディスコース分析、テキスト分析などの研究成果を取り入れ、調査研究、教材開発、教育実践を一貫して行っている点が評価できる。

## 2. 学術賞

該当者無し。

## 3. 新人賞

該当者無し。

(文責 高橋 潔)

### The first JACET Student Presentation Award

The first JACET Student Presentation Award was given at the 50th Commemorative International Convention. The 12 student oral presentations and one poster presentation were evaluated by the seven Chapter presidents with two judges per presentation. The presentations were evaluated for Significance and Relevance to tertiary English education; Organization and Clarity; Originality; and Delivery or Presentation. The judges were very impressed by the level of the presentations and decided to present the award two students: Ms. Kyoko Hosogoshi of Kyoto University and Ms. Chia-Chia Lee of National Taiwan Normal University. Ms. Hosogoshi's work examined the use of L2 captions and L1 subtitles as scaffolding of audiovisual materials and their relationship to the activation of listening strategies. Ms. Lee's study examined a pedagogical model of enhancing oral communication skills in message organization and development of EFL university learners. Her findings indicate the feasibility of a pedagogical model with a combination of four processes: knowledge development and reflection; training for concept mapping; training for message organization and development; and assessment and self-evaluation. Her approach should be valuable for educational contexts in both Taiwan and Japan. We heartily congratulate both students and hope that this Award will help promote their work in English education.

Judy Noguchi (Mukogawa Women's U.)

.....

## 【大会記録】

創立50周年記念大会ということもあってか、大会参加者数が初日の8月31日から最終日の9月2日の3日間、それぞれ1000近くあり、更に、展示業者が80名に西南学院大学所属の4名の教員および主な協力職員30名余り、学生アルバイト当日係りの25名に準備・後片付けの10名に写真係りの2名も含めると優に1,000人を超える盛会とな

りました。記念大会を飾るべく基調講演などに海外から、招待者が85名(9ヶ国と1地域)で、一般参加者としては262名(8ヶ国と1地域)で、また、JACET-SIGのポスターセッションが44名で、国際大会の名に相応しい結果でした。プログラムの詳細の数字です。特別枠としては、基調講演4件、招待講演13件、JACET50シンポジウム3件、特別シンポジウム13件、特別委員会シンポジウム2件、特別委員会ポスターセッション1件、大系シンポジウム8件でした。また一般枠では、研究発表91件、実践報告10件、事例研究10件、シンポジウム12件、ワークショップ8件、ポスターセッション10件、賛助会員発表7件、JACET-SIGポスターセッション34件で、特別枠および一般枠の総計が232件です。また、展示業者は35件(65スペース)でした。

(文責 武井俊詳、西南学院大)

## 発表キャンセルについて

<講演>

8/31 D. Perrin (Zurich U. AILA)

<研究発表等>

9/1 RES F.O. De Groot (Asian U.)

RES N. Okuwaki (Tsuru U.)

RES A. Serag (Akita International U.)

CRA B.R. Morrison (Kanda U. of International Studies)

CRA E.Kim (Gyeongsang National U.)

SPUB R.J. Tannenbaum (Educational Testing Service)

CRA E. Donesch-Jezo(Jagiellonian U.)

9/2 POS A. Yokoyama (Nihon U.)

RES K. Nakao, L. Fryer (Kyushu Sangyo U.)

.....

## 第51回国際大会

馬場千秋 (全国大会運営委員長・帝京科学大)

第50回を機に、全国大会は国際大会と名称を変更することとなりました。来年度は第51回国際大会として次の要領にて開催予定です。

開催期間：2011年8月31日(金)、9月1日(土)、2日(日)

開催校：愛知県立大学 長久手キャンパス

〒480-1198 愛知県愛知郡長久手町大字熊張  
字茨ヶ廻間1522番3

大会テーマ：

大学英語教育への言語理論の応用 —コンテンツとコン  
テキストを重視して—

The Application of Contemporary Language Theories  
to Higher English Education: Focusing on the  
Importance of Content-based and Context-based  
Approaches

大会主旨：

本大会開催の趣旨は、大学教員が確たる指針を持ち難く、英語教育が揺らぐ時代にあって、大学教員みずからが拠って立つそれぞれの専門分野の知識を最大限に活かした大学英語教育を考究し、それに一定の解を求めることにあり、また同時に、その成果を英語教育界はもとより、広く社会一般に発信し、社会的貢献を行なうことにある。

従って、本テーマに凝縮された大会趣旨は次の三点にまとめられ、本大会はそれらを基本として構成される。まず第一に、主題にある「言語理論」が表現する、第二言語習得論を含めた重厚な研究成果とその教育への整形である。そこには、現代の有力な言語研究である生成文法理論、認知言語学、社会言語学からの提言が含まれる。第二としては、副題が示すように、content-basedで専門性を活かす視点と教育への応用であり、そこでは言語研究に限らず他の専門分野の研究と統合した英語教育の可能性を積極的に探究する必要性を示唆している。また、第三として、もう一つの副題が示すように、context-basedで機能を重視した英語教育実践を射程に含めた視野の広がりであり、それは機能主義言語学や語用論の研究成果の活用を期待させるものである。

本大会を通して、昨年度の50回記念国際大会を節目として新たな局面を迎えたJACETの今後の方向性と大学英語教育の在り方について、ともに考え、ともに歩みを進めていくことのできる展望を見出だすための白熱した議論が望まれる。

The aim of the 51st Convention in 2012 is to pursue a unified understanding of principles and methods of higher English education, making full use of knowledge specific to the various academic disciplines in which college and university teachers specialize, at a time when vacillations in the overall philosophy of English education may have left many teachers feeling a lack of confidence and clear direction with regard to their own teaching. A concurrent aim is to contribute to society by releasing and disseminating the results of the conference, both to educators and to the general public.

Accordingly, the 51st Convention will be organized in terms of the following issues, as suggested by the conference theme: (1) the application to English teaching and learning of contemporary language theories such as Generative Grammar, Cognitive Linguistics, and Sociolinguistics, all of which are associated with SLA; (2) the importance of content-based integration of language studies and other areas of research into English education; and (3) the perspective of context-based approaches with reference to functionalism and pragmatics.

Through three days of lively discussions, we hope to follow up on last year's 50th Commemorative

International Convention by identifying new directions for JACET and considering its prospects for contributions to English education in the years to come.

第51回国際大会は、第50回記念国際大会同様、webでの研究発表参加申し込みとなります。学生会員の方を対象とした、学生会員発表枠を継続して設けますので、積極的なご応募をお待ちしております。

さらに、プロシーディングスの作成も今年度同様に行い、大会当日に大会要綱と一緒にお渡しいたします。研究発表へ応募を検討されている会員の方は、合わせてプロシーディングスへの原稿投稿の準備を今から始めていただければ幸いです。

現在、大会開催担当支部の中部支部の先生方と全国大会運営委員によって、大会準備を進めております。大会での参加の皆様の活発な意見交換の場となりますようお願いしております。ぜひご参加いただきたくお願い申し上げます。

#### 編集後記

全国大会運営委員会担当理事、大会運営委員長のご指導とご尽力を賜り、「JACET通信第50回記念国際大会特集号」を発行することができました。大会実行委員会の先生方を始め、原稿をご執筆くださった先生方には大変お忙しい中、ご協力いただき誠にありがとうございます。また、今回は入念に編集されたプロシーディングスからアブストラクトを転用させていただきました。この場をお借りして、国際大会特集号発行にご協力くださいましたすべての皆様に心よりお礼申し上げます。

編集委員 ○塩沢泰子（文教大）  
宮原万寿子（国際基督教大）

2011年11月26日発行

発行者 社団法人大学英語教育学会（JACET）

代表者 神保 尚武

発行所 162-0831 東京都新宿区横寺町55

電話 (03) 3268-9686

FAX (03) 3268-9695

E-mail: jacet@zb3.so-net.ne.jp

印刷所 252-0021 座間市緑ヶ丘3-46-12

有限会社 タナカ企画

電話 (046) 251-5775